

浄願寺

2026.9.1

だより

No.467

TEL045-952-3331

FAX045-952-3332

すべての生あるもの 仏さまの 救いは私に向けられたもの

たけもと たかし
竹本 崇嗣

ホタルの生態

ホタルは清らかな川と街灯のない静かな環境を必要とする、繊細な生き物です。水中のコケに産み付けられた卵から孵化した後、1年ほど貝類を捕食して大きくなり、水辺の地中でサナギになり、成虫になると水だけを飲みながら2週間ほど生きます。

まったく異なる姿に変態していく記録映像を見ると驚くばかりで、どれもホタルの一時期の姿を切り取ったものであるにもかかわらず、同じ生き物であるとはとても信じられません。ただどの姿のときでも「光る」という共通の特徴が、ホタルだと知らせてくれます。

古来より親しまれてきたのは成虫になってからの姿でしょう。短い期間をかすかな光を明滅させながら生き抜く様子がいかにも健気で儚げで、それゆえに愛されてきたのはもっともなことです。やはり美しくか弱いものにところが傾いてしまうのが人情というものなのでしょう。

しかし、幼虫時代の意外にどう猛で肉食で大食な姿を知ると、ちょっと印象は変わってしまいそうです。「成虫はキレイだけど、幼虫はちょっと…」というのは、なんだか失礼な気がしますね。

ホタルの生涯がすべて自分の思う美しさに彩られていてほしいなんて、勝手な理想の押し付けというものです。勝手に期待して、勝手に裏切られて、勝手にガッカリしている。ホタルの生態から私の身勝手さが知らされます。

人間だけでなく

そしてふと思うのです。ホタルのあり方に良し悪しをつけることなど、おこがましいことではないだろうか。お聖教を開くと「十方衆生」とのお言葉がいたるところに見られます。阿弥陀さまが「かならず救う」とお誓いくださった「一切の迷

浄願寺合同法要【秋彼岸】

◆日時 九月十九日(土) 十時から

◆場所 浄願寺本堂

*どなたでもご参加いただけます。



いの生類、すなわち生きとし生けるものすべて」を指します。衆生というと、煩惱に束縛されて苦から離れられない凡夫、つまり人間を指すことが多いようです。しかし、阿弥陀さまが「かならず救う」とお誓いくださった対象が、人間だけということがあるのでしょうか。たまたま人間としての生を得て、浄土真宗のみ教えを聞かせていただきました。真実信心をめぐまれて「南無阿弥陀仏」とお念仏よこぶ身にならせていただきました。

もし人間以外の生であれば、それにふさわしい救いの手だてが用意されていたはずです。そうでなければ「十方(すべての方角)の衆生」とおっしゃるはずがありません。人間である私には、人間以外の生類のための、救いの手だてが見えず、聞こえず、理解できないだけなのだ、と味わっております。

ホタルも私も、阿弥陀さまのまなざしの前では救わずにはいられない一切衆生のともがらです。小さな生き物をとおして、仏さまの救いは私に向けられたものなのだと気づかせていただくとき、小さな命が輝いて見えます。

そんなホタルと共に生きる環境を維持しようという取り組みは、ホタルやそのエサになる貝類の放流という形で行われてきましたが、現在では問題点が指摘されています。

日本固有種であるゲンジボタルは東日本型と西日本型に分けられ、見分けることは難しいものの、遺伝子レベルで異なるとか。それらを混在させてしまうと交雑の結果、遺伝子汚染が引き起こされるというのです。

またホタルの放流には他にも食害や環境破壊などの問題がありますが、当事者であるホタルは文句ひとつ言うでもなく、その一生をまっとうしています。生まれた場所で、運ばれた場所で、それぞれ生き抜いています。

でも、もしかしたらホタルのほうが人間を操っているとは考えられないでしょうか。人間の感情や価値観を利用して、長距離の移動や、より強い種の誕生を実現しているのかも。支配されているのは、実は人間のほうだった？

一切衆生を聞かせていただくと、他の生き物に対する敬いやおそのれが育まれて、実に良い感じですね。